

変身願望

日向 佐保

「へんしーん！」と言って、小さな子どもたちが、ドラマやアニメのキャラクターのコスチュームに身を包み、その役柄になりきって遊んでいるのをよく見かけることがあります。こどもの頃を振り返ると、誰しも覚えがあるのではないのでしょうか。

私の場合すぐに思い出されるのは「ままごと」です。仲の良い男の子を家に連れてきて、六畳間の片隅に作った小さな茶の間の座布団に正座してもらいます。そして母に天神様で買ってもらった、ままごと用のご飯茶碗に色とりどりのビーズを入れ、「おとうさん、今日は混ぜご飯ですよ。」と言って、男の子にストローの箸を持たせ、食べる真似をもらう、勿論私は前掛け姿の、一家を取り仕切るお母さん、でした。

憧れる対象には様々なものがありますが、自分にとってのヒーローになりたいという欲求は、こどもだけでなく、おとなであっても程度の差こそあれ、万人が共通して持っている願望だと言えます。

そんな思いを満たすべく、巷にはたくさんさんの写真館があり、様々な衣装が取り揃えられています。例えば、「舞妓・芸鼓」「京都伏見太夫」「江戸遊女」「町娘」「新撰組」「鹿鳴館」「源氏物語」「十二単・姫」「美魔女」と、ちょっと調べただけでもかなりの種類です。

また人は、旅に出たり、読書をしたり、映画を見たりといった、趣味という名のもとに、非日常への思いを満たす手段として様々なことを行っています。そんな中でも変身願望は特に顕著な表現方法ではないかと思えます。ひとときわ目立つ方法なので眉をひそめる人もいるかもしれませんが、心の根底に流れる思いは、同じ心理だと感じます。

実は、私も長い間変身したいと思う姿がありました。きっかけはかなり古く、昭和五十年代後半だったと記憶していますが、サンシャイン劇場で上演された、『ふるあめりかに袖はぬらさじ』という劇の中で、ある女優さんの花魁姿を目の当たりにしたことです。その豪華で艶やかな出で立ちに、どこか侘しげな苦悩を秘めた佇まいが、脳裏に焼き付いてしまい、その残像を繰り返し楽しんでいるうちに、私もいつかあんな衣装を身に纏ってみたい、と願うようになったのです。

その時から実際に体験するまでかなりの年月が過ぎ、あつという間に五十歳を迎える年となりましたが、時がいくら流れても、まだ頭の片隅にそのささやかな夢が存在していましたので、悔いを残さないためにも、思い切って実現に向けて行動してみることにしました。

離れた地で未知のものを体験してみたいと、京都にある写真館から、一軒目星をつけたのですが、予約をする前にどうしても解決しなければならぬことがありましたので、メールで問い合わせをしました。

実のところ私にとってはすごく恥ずかしいことなのですが、小さい頃から頭が大きく、厭な思いを何度もしてきましたので、花魁の衣装は着たいものの、もしかつらが入らなかつたらと、とても気がかりで仕方がなかつたのです。自分の心をこっそり覗いてみますと、私が何十年も思いきれなかつた要因はそこにあつたのかもしれない。

今でも忘れられない記憶の一つなのですが、二十代の頃習っていた着付け教室で、白無垢姿になつたことがあります。その時カツラをのせてもらいましたところ、まわりの生徒さんが転げ回るように笑つたのです。すごく嫌な予感がしたので、さりげなく鏡を見たら、やはり不安は的中。かつらが入りきつていなかったのです。その時は、泣きたい気持ちを抑え、みなと一緒に笑いましたが、他人から見るとたいしたことではなくても、コンプレックスというものは、本人にとつてはこの上なく屈辱的なものです。そんな記憶がトラウマのようにしっかりと頭にこびりついていました。

写真館からはこんな内容の返信がありました。

「花魁のかつらは大きめに作つてあるので、多くの人は中に詰め物をして被っています。今まで入らなかつた人はいません。」

それなら大丈夫かなと少しだけ安堵し、意を決して予約をお願いしました。でも心の中ではほんの僅かですが、万が一被れなかつたら、きつと私は立ち直れないくらい傷つくのだからなあ、という思いがよぎつたことも確かです。

予約当日になり、一抹の不安と、ほのかな期待で膨らむワクワク感とともに新幹線に乗りました。写真館に到着すると、同じ時間帯に数人の若い女性たちもいました。

まず、待合室で衣装カタログから自分が着たい衣装を選び、その後肌襦袢に着替えてから隣のメイク室へ入ります。テレビで見たことがあるような役者さんたちの控室といった感じで、細かい化粧道具がたくさんあり、少し雑然としていました。壁一面に鏡が掛けられていて、その前には三、四人座れるようになっていましたので、先ほどの女性たちと横一列に並び、これから始まることに、少し緊張しながらも心躍らせてメイクさんに身を預けました。始めに頭を手拭いでしっかりと巻かれてからお化粧が始まりますが、その時メイクさんが、煌びやかな花魁のかつらを持ってきて、手拭いを巻いた私の頭に被せてみました。

「大丈夫ですね」

ホツと胸をなでおろしたのは、私だけではなかったようです。かつらの心配がなくなった途端、心の重荷が一気に取れ、ルンルンと飛び跳ねたくなるほど晴れやかな気持ちになりました。

いよいよお化粧の始まりです。顔をドーランで真っ白に塗られ、その上を弾むように筆が動き回ります。手慣れた手つきで瞬く間に顔が作られていきます。特に目元を描かれるときは、メイクさんの眼差しから真剣さがヒシヒシと伝わってきました。一筆ごとに、鏡に映る自分の顔が変化していくのがとても新鮮でした。襟足をVの字二本にかく筆が、少しくすぐったいと思っているうちに、あつという間にシワ一つない見事な顔が完成しました。そしてすっぴりとかつらを被せてくれました。

まるで私の為に作られたかつらのようでした。鏡に映った顔をうっとり眺め、心の中で自画自賛している自分が、とても可笑しかったです。ただかつらがあまりにピッタリだったことが、やはり私の頭が大きいことを証明してくれましたが。

首から上が出来上がったので、隣の撮影室に移動し、花魁衣装の着付けです。仄かな行燈のような薄明かりの中で、重厚な着物も帯も、自分の意思とは無関係なところで魔法のように着付けられました。そして最後に私が全く想定していなかった「花魁下駄」を、支えてもらいながら履き終えると、長い間憧れ続けた『花魁姿』が見事誕生しました。

「うわっ、きれい！」心の中で叫びました。まるで時間が止まったかのような幻想的な空間に、豪華絢爛な衣装をまとった『花魁』が、確かに存在していました。

でもハツと現実に戻ると、喜んでばかりはいられません。下駄が三十センチ近くもあり、重たいカツラと衣装をつけて、僅かに立ち位置を変えることすらままならず、バランスを保って立ち続けることは至難の業でした。その日に至るまで、かつらのことだけが気懸りで、下駄のことなど全く考えていなかった自分を悔いしましたが、時すでに遅し。これでもしバランスでも崩そうものなら、「足首骨折するぞ」と、心の声が聞こえました。京都で、それも花魁姿で怪我をしたらこれは笑いものだと、家族や友人の呆れ果てた顔が脳裏をかすめましたので、細心の注意を払いました。

さて、肝心の撮影です。

カメラマンから色々なポーズを教えてもらいましたが、下駄の件もあり、顔がこわばってしまいます。「もつと口角を上げて」と何度も言われたのですが、「口角ってどこだっけ？」と気持ちが上がってしまい、自分の口角に辿り着くまで大変でした。途中で下駄を脱がせてもらい、素足で畳に立てましたので安定はしましたが、煙管をふかすポーズや、その他諸々

の注文になかなか応えられず、ポーズをとることの難しさをひしひしと感じました。私の緊張が取れてきた頃はもう終盤、夢のような時間はあっという間に過ぎようとしていました。かなりの工程を経て出来上がった花魁姿でしたが、現実に戻るのはいたって簡単、名残惜しさでいっぱい衣装もあつという間に脱ぎ終わり、お化粧を落とすのだけは少々てこずりましたが、無事に元の顔に戻り、一大イベントに幕が閉じられました。長い間、密かに思い続けていた夢が叶った一日でした。

人はみな、毎日同じようなフレーズの繰り返しの中で生きていますが、そんな中でほんの少しでいいから、意識していつもと違う時間を過ごしてみると、心にも微妙な変化が現れ、物事も少し違った角度から見るようになります。人間って不思議です。たったそれだけのことで心機一転できることもあるのです。

日々、たくさんの情報が私たちの五感を通して入ってきます。いつでもどこでも、自分のアンテナが大切なターゲットをキャッチできるように、しっかりと張り巡らしておく必要があります。そしてキャッチできたらしめたもの。自分の中に逃がさないように留め、大切に見守ることによって、得難い経験へとつながるかもしれません。

(了)